

令和8年5月7日

鹿追町議会議長 上 嶋 和 志 様

鹿追町の行財政を考える会
代表 清 水 浩 徳

令和8年度政務活動費に係る調査及び収支報告について

鹿追町議会政務活動費の交付に関する条例第8条第1項の規定により、下記のとおり令和8年度政務活動費調査及び収支報告を提出します。

記

- | | | |
|---|------------|----------------|
| 1 | 政務活動費調査報告書 | 別紙 1 |
| 2 | 政務活動費収支報告書 | 別紙 2 |
| 3 | 会派出席者 | 清水浩徳、上嶋和志、安藤幹夫 |

別紙 1

令和 8 年度政務活動費調査報告書

- 1 調査期日 令和 8 年 4 月 1 9 日（日）～ 4 月 2 1 日（火）
- 2 調査目的 市町村職員中央研修所 主催
市町村議会議員特別セミナーを受講
- 3 調査項目
 - （1）農業の新たなかたちへ
（株式会社和郷代表取締役、農事組合法人和郷園代表理事
木内 博一 氏）
 - （2）これからの地方議会に求められるもの
～地域マネジメントの視点の重要性～
（西南学院大学法学部教授 勢一 智子 氏）
 - （3）生成 A I は議会を変える ～“補完する” 価値、“決める” 責任～
（青森大学社旗学部教授 佐藤 淳 氏）
 - （4）『脳と習慣』の切り離せない関係
（株式会社感性リサーチ代表取締役、人口知能研究者 黒川 伊保子 氏）
- 4 調査場所 公益財団法人全国市町村研修財団
市町村職員中央研修所（市町村アカデミー）
千葉県千葉市美浜区浜田 1 丁目 1 番地
- 5 調査結果 6 の所感及び提言に含む
- 6 所感及び提言（活用策・活性策） 別紙

6 所感及び提言（活用策・活性策）

【清水浩徳】

自治体が直面している重要課題や時局の話題を取り上げる宿泊型特別セミナーに参加し、最新の情報をもとにそれぞれの分野で活躍されている講師による講演を全国市町村議員134名が受講し、地方自治体の現状・課題・解決策について幅広く学んだ。

（1）農業の新たなかたちへ

千葉県香取市を拠点とする農事組合法人「和郷園」は、生産から販売、リサイクルまでを一貫して手掛ける「6次産業化」の先駆者である。

最大の強みは、消費者の需要に合わせて生産する「マーケットイン」の徹底と独自の品質基準とデータ管理により、大手企業（セブンイレブン、JAL等）との直接取引を実現し、農業の収益安定化を図っている。

また、規格外野菜をカット野菜や冷凍食品へ加工する工場の運営や、野菜くずをエネルギーや肥料に変えるバイオマス発電・堆肥化施設の活用など、資源循環型農業の確立やITによる生産管理の「見える化」も進めており、収益性と持続可能性を両立させた「稼げる農業」のモデルとして国内外から高く評価されている。

鹿追町は、すでにバイオガスプラントによる資源循環において日本トップクラスの先進地であるため、和郷園のビジネスを掛け合わせることで、鹿追町の農業をさらに「高収益化」させるヒントがあると思われる。

（2）これからの地方議会に求められるもの

住民自治を事実化させる「合議体」としての機能強化である。

第1に「監視・評価機能の質的向上」が挙げられる。二元代表制の一躍として、執行部の施策を単にチェックするだけでなく、データに基づきその妥当性を厳しく検証する能力が不可欠である。

第2に、「政策立案能力の強化」である。反対や修正に留まらず、議員間での自由討議を活性化させ、議会自らが条例制定や具体的な政策提言を行う主体性が問われる。

第3に「住民参画のプラットフォーム化」である。単なる情報効果を超え、SNSやワークショップ等を活用して多様な住民の声を吸い上げ、政策に反映させる「双方の対話」の場となることが求められる。

成り手不足という課題に対し、ICT活用や開かれた議会運営を通じて、多様な人材が参画できる民主主義の基盤を再構築することこそが、今後の地方議会に課せられた使命である。

（3）生成AIは議会を変える

生成A Iは、既に議会や政治の在り方を根本から変え始めている。その影響は、単なる「事務作業の効率化」にとどまらず、「政策形成のプロセス」や「有権者との対話の質」にまで及んでいる。

議会事務における生成A Iの導入は、主に「情報の構造化」と「即時性」で劇的に変化をもたらしている。

まず、数時間に及ぶ議事録作成がA Iにより自動化・要約され、論点の抽出が数分で完了する。

また、行政側答弁のドラフト作成や、膨大な過去事例・法令との整合性チェックも迅速化されている。

これにより職員はルーチンワークから解放され、より高度な政策立案や町民対応にリソースを集中できるようになり、議会全体の運営スピードが向上する。

議員と有権者の接点を「多量」かつ「双方向」に変容させ、A Iボットが議員の身分として24時間体制で政策回答を行うことで、物理的に困難だった数人の町民との個別対話も可能になる。

結論として、生成A Iは議会を「より速く、よりデータに強い組織」へと変えるが、同時に「A Iが生成した意見を、人間である議員がどう責任をもって判断するか」という「人間の責任」の重要性が、これまで以上に問われるようになっている。

（4）脳と習慣の切り離せない関係

脳には、性別や年齢、状況に応じて「無意識に発動する回路」が存在する。例えば女性脳の共感欲求や男性脳の解決志向などは、生存のために最適化された「脳のクセ」に過ぎない。

しかし、多くの人はこの反射的な反応を「性格」や「相性」と思い込み、人間関係の摩擦を生んでいる。

そこで重要になるのが、脳の回路と個人の意思を切り離す「習慣」である。イラッとして瞬間に「これは脳の防衛本能が動いただけだ」とメタ認知する習慣を持つことで、感情に振り回されることはなくなる。

「言葉の選び方」や「間の取り方」をルール化し、脳に新しい入力習慣を覚えこませることで、対人ストレスを劇的に減らすことが可能になる。心の問題を「精神論」ではなく「脳の運用法」として捉え直すことが、黒川伊保子流の考え方である。

【上嶋和志】

（1）農業の新たな形へ

千葉県香取市「農事組合法人和郷園」代表の木内氏は、農業の6次産業化（生産・加工・販売の連携）を強力に推進し、グループ全体で年商70億

円を誇る組織を築き上げた人物である。

その活動は香取市に留まらず、福井県や福島県南相馬市、さらに海外ではタイのバンコクにおいて日本式の栽培管理を導入し、現地での開発・販売を手掛けています。消費者のニーズを的確に捉えた加工や冷凍技術による高付加価値化、植物工場の運営、さらにはリサイクル事業の展開など、その多角的な経営手法はメディアでも高く評価されている。

同氏の取り組みは、わが町の農業が今後目指すべき「持続可能な高付加価値農業」のモデルとして、極めて示唆に富むものであると感じました。

(2) これからの地方議会にもとめられるもの

① デジタルとA Iの社会実装

マイナンバーカード普及を背景に、窓口の効率化と住民利便性を向上。A I活用を前提とした教育・行政設計を進め、人手不足を補いつつ質の高い公共サービスを実現する。

② 広域連携と自然資本の保全

圏域を越えた施設共同利用や「連携協約」を推進し、規模の経済を追求する。同時に、生物多様性を「社会資本の基盤」と捉え、自然資源の保全を通じて地域のレジリエンスとウェルビーイングを高める。

①. ②より

地域の創意工夫を国へ繋ぐ分権改革を加速させ、資源の「選択と集中」に向けた住民との合意形成を図る。多様な価値観を統合し、持続可能な地域社会の再設計がわが町でも急務であると思われる。

(3) 生成A Iは議会を変える

地方議会におけるA I活用については、人口減少や行政課題の複雑化が進む中、住民の声を的確に政策へ反映し、議会の意思決定の質を一層高める観点から重要性が増している。

A Iは議員質問の作成や調査分析の効率化に寄与し、政策立案能力の向上が期待される一方、過度な依存により現場感覚の希薄化や、住民意見の軽視、説明責任の低下といったリスクも指摘されている。このため、A Iはあくまで政策提言を補完する手段として位置付け、段階的な導入を図るとともに、活用に関するガイドライン整備を進める必要がある。あわせて、ファクトチェックの徹底や情報管理体制の強化を図り、透明性と信頼性を確保しつつ、適切な活用を推進していくことが求められる。

(4) 心のトリセツ

自己肯定感の向上、生活リズムの改善、及びコミュニケーションの質が、脳機能や学習効果に与える影響と具体的な実践策について

① 脳機能と自己肯定感の相関

自己肯定感は脳内のホルモン系と密接に関わり、集中力や創造性を左右する。失敗を「学習の機会」と捉え、自己信頼を高めることで、視床下部などの脳中枢が活性化し、目標達成率が向上する。日々の自己表現や適切な自己評価の積み重ねが、脳の動作を整える基盤となる。

② 生活リズムによる学習環境の最適化

睡眠は記憶の定着と再構成に不可欠であり、メラトニンやセロトニンの分泌を促す光の管理（朝日の摂取や就寝前の調光）が重要である。規則正しい起床、適度な運動、スマホの制限など、体内時計を意識した生活習慣は、翌日の学習パフォーマンスと創造性を最大化させる。

③ 心理的安全性の醸成と教育実務

組織や家庭における「たわいもない会話」は心理的安全性を高め、エラーの抑制と成長を促す。相手を否定せず、過程を承認する共感的な対話は、信頼関係を強固にする。A I時代に必要な思考力を養うためにも、創造的な対話を通じた言語化能力の育成が、教育現場及び家庭での急務である。

【安藤幹夫】

アカデミー議員特別セミナーに参加し、農業の新たなかたちへ（新規就農・移住定住）、これからの地方議員に求められるもの（地域マネジメント視点の重要性）、生成A Iは議会を変える、心のトリセツ（脳と習慣の切り離せない関係）の4分野について学ぶことで、新しい発見をすることができた。

最初に、農業に関わる人の働き方を、毎日もっと楽しくしたいとの考えから、今の日本の農業生産額は約10兆円、これに対し消費生産額は約100兆円、消費者の口に届くまで約10倍になっている現実を踏まえ、農業を魅力ある産業に変え、次の世代へ職を通して豊かな未来を創造する理念と、食べる、作る、繋ぐ農業を通して幸せを育むが、行動指針とし生産者100戸で構成し年間50品目の野菜を完全6次産業化し、安定供給を実現全国、世界に向けて販路拡大している専門農協としての農業法人は参考となった。

しかし、本州と北海道では気象条件に大きな格差があり、6か月間しか生産できない北海道の環境では難しく、大きな違いを感じる。ただ、〈地域創造アドバイザー制度〉の活用で新規就農・移住定住施策を、検討実現させることが今からの北海道農業の未来を考える重要な課題と捉えることができた。

次に、地域マネジメントの視点から、地域の多様性に応える地方議会に求められるものは何かについて学ぶことができた。近年人口減少社会が本格的に到来し、地方自治体の変化、行政ニーズの変化にあって地方議会は、どのような役割を果たすか、住民の価値観の多様化により、住民が地域価値の発見に気付き、住民の思いにどう応えるかを課題に行動することが地方議会の役割と考える。

地方自治法第89条に「普通地方公共団体に、その議事機関として、住民が選挙した議員をもって組織される議会を置き、住民の負託を受け誠実にその職務を行わなければならない」とある。地域マネジメントの視点から地方分権改革とその成果の活用、DX・デジタル化、多様な広域連携など多岐にわたる活動を少数精鋭で実行していく必要性に迫られている。

そこで今後考えられる事項として、「生成AIは議会を変える」の講義により、補完する価値・決める責任について具体的な学びができた。

生成AIを使った議員の質問作りや調査の効率を上げるだけでなく、住民の声を深く理解し、より良い政策づくりに活用できることを理解した上で次の点に注意することは、生成AIを便利な道具としてだけに使い、スピードや効率を重視すると、議員の仕事がAIで作成した原稿を読むだけになり住民の声が置き去りになる。

一方で「議会の伝統が大事」「AIなんて信用できない」として生成AIを使わず運営し続けた結果、社会全体が変化する中で議会だけが時代から取り残されかねない。生成AIで作成した議員の質問事項に対して、行政側がAIで作成した答弁を行なったら、議会の不要論が出かねないことを充分考慮すべきである。生成AIを、しっかりと理解し活用法・役割分担を構築した上で、議会全体の意思決定の質を高めることが議会の向上につながると考える。

ここで、具体例として議会広報紙を作成する際、生成AIを活用した場合、住民が理解しやすい、住民が見やすい広報紙作成が可能となり、議員の負担軽減につながることは充分考えられる。

まとめとして、最適な解決策を決定し、責任をもって施策実現を推進するAIが出力できても、人間が引き受ける必要性があるのは間違いではない。今後、議員に強く求められることではないか、考えさせられるところであり大きな課題となる事は、間違いないと思う。

最後に、生成AIとは真逆の脳と、習慣の切り離せない関係について学んだ。

脳の定義とは好奇心にあふれ、集中力があり、朗らかで困難を楽しむユーモアがあり意欲が萎えない、イライラしない、モヤモヤしない、ガッカリしない、恨まない、妬まないこれらは脳がもともと持っている素質であり、多くの人がそれを消費しながら生きていることに気づかされた。

脳を整える暮らし方とは、早寝早起き良い食事、適度な運動が必要と言われていた。日常においてたわいのない話雑談は勘を鍛え発想力を上げて、身体的なテクニックも向上させる脳の万能エクササイズとも言われる。

コロナ禍以降家庭、学校、職場からたわいもない話が消えている。たわいもない話が浮かぶためには、二つの原則として、相手の第一声をいきなり否定しない、自分の第一声をダメ出しから始めないことが心理的安定性に不可欠となる。

とにかく「いいね!」「わかる」で受け止め、いきなりのダメ出しは残酷だと心得、褒めるより認めることが重要で総論では褒め、各論で認めることが正しい

評価につながると考えられる。

何事においてもプロとは失敗しない人と言うのではなく失敗をリカバリーできる人の事を言い、失敗を他人のせいにしない、過去の失敗をくよくよ言わない、挑戦して失敗したなら「ナイスチャレンジ」ととらえて考える必要があり、笑顔は、脳を前向きにする力があり、自分のみならず周囲をも前向きにさせる、そんな考え方が社会を豊かにする人生を送ることができるものと認識した。

今回の研修では、一議員として人として深く考えさせられる機会と、地域マネジメントや今の時代に合った生成A I の活用での地域づくり、議員としての資質向上に大いに参考となった。

別紙2

令和8年度政務活動費収支報告書

1 収 入

(単位：円)

科 目	収 入 額	備 考
政務活動費	172,618	町より助成
自己負担金		
合 計	172,618	

2 支 出

(単位：円)

科 目	支 出 額	備 考
調査研究費		
要請・陳情活動費		
研 修 費	172,918	車 賃《別紙明細》 7,200円 航 空《 〃 》 80,448円 鉄 道《 〃 》 4,020円 バ ス《 〃 》 4,500円 宿 泊《 〃 》 31,500円 使用料《 〃 》 2,700円 参加費《 〃 》 42,000円 役務費《 〃 》 550円
会 議 費		
資料作成費		
資料購入費		
広 報 費		
事 務 費		
合 計	172,918	

3 精算（不足額）

300円（帯広空港駐車場代概算支出分）

【別紙】

■ 車 賃

日付	説 明	明 細	備 考
4/19・21	役場 ⇄ 帯広空港	60円 × 60km × 2回 = 7,200円	
計		7,200円	

■ 航 空

日付	説 明	明 細	備 考
4/19	帯広空港 ⇒ 羽田空港	13,408円 × 3 人 = 40,224円	JAL572
4/21	羽田空港 ⇒ 帯広空港	13,408円 × 3 人 = 40,224円	JAL579
計		80,448円	

■ 鉄道

日付	説 明	明 細	備 考
4/19	羽田空港駅 ⇒ 浜松町駅	520円 × 3 人 = 1,560円	モノレール
"	浜松町駅 ⇒ 鶯谷駅	180円 × 3 人 = 540円	山手線東京方面
4/20	鶯谷駅 ⇒ 秋葉原駅	150円 × 3 人 = 450円	山手線上野方面
"	秋葉原駅 ⇒ 幕張本郷駅	490円 × 3 人 = 1,470円	JR中央総武線
計		4,020円	

■ バス

日付	説 明	明 細	備 考
4/21	海浜幕張駅 ⇒ 羽田空港	1,500円 × 3 人 = 4,500円	京成バス
計		4,500円	

■ 宿泊代

日付	説 明	明 細	備 考
4/19	東横INN鶯谷駅前	10,500円 × 3 人 = 31,500円	
計		31,500円	

■ 使用料

日付	説 明	明 細	備 考
4/19～21	駐車場使用料	2,700円	帯広空港
計		2,700円	

■ 参加費

日付	説 明	明 細	備 考
4/20・21	研修	14,000円 × 3 人 42,000円	研修(2日間)・ 宿泊(研修所1泊)・ 食事・資料等含む
計		42,000円	

■ 役務費

日付	説 明	明 細	備 考
	振込手数料	550円	参加費振込 ※ATM振込
計		550円	

合 計		172,918円	57,640円／人
-----	--	----------	-----------